

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 7 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381269

研究課題名(和文) 養護教諭の専門性向上を目指した養護実習の体系的プログラムの開発

研究課題名(英文) Systematic practice program developed to enhance Yogo teacher expertise

## 研究代表者

齋藤 千景 (Saito, Chikage)

十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：50618163

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は養護実習における体系的プログラムの開発に向け、養護教諭養成大学と実習を体験した学生を対象に質問紙調査を実施し、養護実習の実態と課題を明らかにした。看護系大学、学際系大学、短期大学は実習形態が類似していた。教育系大学は他の養成大学より実習の日数や回数において充実していた。さらに、実習の目的については以前から認識されていた項目はどの養成大学においても網羅され、目的と評価の一貫性も保たれていた。結果、実習において学生の学びをサポートする事前指導や実習中の体制づくりの必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This study, by administering a questionnaire survey to Yogo teachers colleges and students, elucidated the real conditions and difficulties of Yogo teacher practice to develop a systematic practice program. Nurse colleges, interdisciplinary universities, and junior colleges have similar practice systems. Universities of education have more satisfying systems than others in terms of the number of days and times for internship. For all types of educational institute for Yogo teachers, previously recognized items of practice purposes were covered. Consistency between purposes and evaluation was also maintained. Results suggest that instructions given before internships are necessary, as is producing a system to support students to learn during internships.

研究分野：養護学

キーワード：養護実習 養護教諭 実習内容

## 1. 研究開始当初の背景

2014年現在、養護教諭養成機関は大学136学科(教育系大学14.0%、看護系大学54.4%、学際系大学31.6%)、短期大学21学科、指定教員養成機関8校(うち養護教諭特別別科6学科)である<sup>1)</sup>。1993年と比較すると、短期大学と養成機関は減る一方、大学は7倍に増えており、中でも看護系大学、学際系大学(福祉系・心理系・栄養系・保健体育系等)が増加した。さらに、養護教諭の免許以外の教員免許、看護師や保育士等の資格を同時に取得できる学科が多く設置され、カリキュラムが多様化している。

養護教諭養成における養護実習は、大学での学習と教育現場での実践が融合する貴重な機会として位置づけられる。養護実習は教員免許取得における教育実習に相当する実習で、教育職員免許法により1種免許状には5単位、2種免許状には4単位を取得することが義務付けられている。専門職の養成において、実践能力を高めるためには、現場に臨む体験が必要であり、養護実習は大学で学んだ基礎や理論を実際の教育実践場面において検証して、発展させていく機会と位置づけられる。しかしながら、養護実習に関する規定が定められている教育職員免許法施行規則には、実習の校種や時期、内容、方法についての具体的な記載はみられない。また、実習に関する書籍は出版されているものの、実習に関する統一された規定はなく、養護実習の内容は養成機関と実習校の裁量に任されているのが現状である。しかしながら、子どもの健康課題の変化や社会背景とともに変化する学校教育のニーズや役割に対応するためには、養護実習においても時代に合った内容の精選が必要となる。さらに言えば、いかなる養成機関を卒業しても卒業時における養護教諭としての専門的力は担保されなければならない。そのためには学習の集大成ともいえる養護実習においても、質を

保証するための実習内容の検討が必要である。

先行研究では、養成機関により養護実習の実態が大きく異なることが示され<sup>2)</sup>、養成機関における目的を共通認識する必要性や評価を充実させる必要性が明らかにされている<sup>3)</sup>。しかしながら、前述のとおり急激に養成大学が増加し、多様な学問背景を持つ養成機関で養護教諭養成が行われている現在、養護実習における体系的プログラムを開発するために、各養成機関で行われている実習内容の現状と課題を明らかにする必要がある。

## 2. 研究の目的

研究の目的は以下の2点である。

- (1) 養護教諭養成大学を対象に養護実習の実施形態や内容を明らかにし、実習内容の質を保証するための課題を明らかにする。
- (2) 養護実習生を対象に養護実習の現状と学生の学びに与える要因を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1) 2014年2月~3月に、養護教諭養成大学140校163学科の養護実習担当者に対して、郵送にて質問紙調査を実施した。調査内容は実習の形態について、回数と学年、時期、期間、実習校の選択方法、必修・選択の有無を記述式で回答を求めた。さらに、実習の目的、実習内容、記録の方法、評価の項目と方法、実習校への訪問回数と内容、事前事後指導の時間と内容について選択式で回答を求めた。回答のあった55学科(回収率33.7%)のうち、回答に不備のあったものをのぞき53学科を分析対象として、教育系大学、看護系大学、学際系大学、短期大学、特別別科(以下、教育系、看護系、学際系、短大、別科と記す)の5群間で分析した。

(2) 2014年5月~2014年12月に、養護実習終了後の学生317名を対象に自記式質問紙を実施した。内容は養護実習の時期、期間、校種については記述式で、実習の内容と方法、目標達成度、実習への意欲、サポートの状況、

実習における自己の変化については選択式で尋ねた。回収した 298 名（回収率 94.3%）のうち有効回答数 295 名（99.0%）を分析した。

#### 4. 研究成果

(1) 養成校の内訳は大学 85.2%、短期大学 11.1%、別科 3.7%であり、学科別の内訳は教育系 27.8%、看護系 44.4%、学際系 25.9%であった。実習目的の項目は「養護教諭の役割や職務の理解と体得」が 98.1%と最も多く、「養護学の理論と実践の統合」が 46.3%と最も少なかった。実習で学ばせたい内容は「保健室経営」が 92.6%と最も多く、「保健学習」が 59.3%と最も少なかった。実習校への訪問は 98.1%が実施しており、訪問回数は平均 1.43 回で、実習中に訪問している学校が 96.3%と一番多かった。評価項目は「子ども及びその健康理解・把握」が 87.0%と最も多く、「養護学の理論と実践の統合」は 24.1%と最も少なかった。学生の自己評価を実施している学校は 79.6%であった。養護実習の現状と課題を明らかにした結果、看護系、学際系、短大は実習形態が類似していること、教育系は他の養成大学より実習の日数や回数において充実していることがうかがえた。さらに、目的や評価項目においては「学校教育に対する理解」、「子ども及びその健康理解・把握」、「学校保健活動に対する理解」、「養護教諭の役割や職務の理解と体得」、「養護教諭の実践能力や技術の習得」など以前から認識されていた項目はどの養成大学においても網羅され、目的と評価の一貫性も保たれていた。

養護実習の課題として、目的項目において「教育観・養護観の体得」、「養護学の理論と実践の統合」の養成大学間の共通理解が進んでいないこと、養成大学により養護実習で学ばせたい内容にばらつきがみられたこと、実習校の評価と自己評価の観点が一致していないことがあげられた。今後各養成大学の

特徴を活かしながら、学生、実習校と養成大学の 3 者が実習の目的、内容、評価を共通に確認できる事前指導を含めた連携体制の必要性が示唆された。

(2) 実習に関して 85.5%が満足していると回答した。実習内容とその方法に関して、救急処置においては 86.4%、保健指導集団においては 77.6%、環境衛生においては 76.9%が「体験」をしていた。学校運営においては 96.2%、安全管理においては 78.6%、組織活動においては 74.5%が「体験なし」か「講話のみ」であった。保健学習においては 35.3%が「体験なし」であった。実習内容は項目によって体験しやすい項目と、体験しにくい項目があることが示された。

目標の達成度において、全体の 70%以上が全ての項目において目標を達成できたと回答した。しかしながら、「学校現場における研究の意義や必要性の理解」「子どものニーズに応えるための方法の取得」においては「どちらでもない」又は「できなかった」との回答が 25~28%であり、他の項目より多かった。特に「子どものニーズに答えるための方法の取得」は養護教諭として根幹をなす項目であり、養成大学も 90%以上が目標に挙げている項目であることから対策が求められることが示された。

実習への意欲に関して、全体の 90%以上が「積極的に取り組んだ」、「意欲的に取り組んだ」と回答した。しかしながら、「実習中に気持ちが不安定になった」の回答が 38.3%、「指導養護教諭とのコミュニケーションがとれなかった」の回答が 10.2%、「大学のサポートが得られなかった」の回答が 17.6%であったことから、実習中の学生のサポートの必要性が明らかになった。

実習中の意欲・態度項目 12 項目に対して因子分析（最尤法プロマックス回転）を行った結果、「意欲的に取り組む姿勢」、「指導者との良好な関係」、「積極的な態度」の 3

因子が抽出された。自身の変化 15 項目に対して、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果『社会人としての態度』『子どもへの理解の深まり』『養護教諭への志向性』『養護教諭の仕事に対する理解の深まり』の4因子が抽出された。これらの意欲・態度の3因子と自己の変化の4因子は「実習の満足度」、「目標の達成度」と正の相関関係がみられた。

これらの結果から、先行研究で指摘されていた実習内容や目標の達成度等の改善は見られているものの、実習において学生の学びをサポートする事前指導や実習中の体制づくりの必要性が示唆された。

今後の展望としては、指導養護教諭を対象に調査を実施し、実習生を受け入れる立場からみた養護実習の課題を明らかにする。

先行研究では、指導養護教諭は、実習内容・受け入れ態勢、学生への個別性への対応、学生の質の変化などの指導上の困難点<sup>4)</sup>があげられ、評価において指導養護教諭の求めるレベルに実習生が達していない<sup>5)</sup>などの課題があげられている。一方で指導養護教諭が指導を通して、自己の対応を見つめなおし、養護教諭の専門性を再認識し、新たな実践への意欲をもつことができる<sup>6)</sup>等、指導養護教諭自身の学びも報告されている。今回の学生を対象にした調査から、指導養護教諭とコミュニケーションの図れない学生が全体の1割いること、指導養護教諭と養成大学の連携の必要性があることが示された。これらを踏えて指導養護教諭を対象に調査を実施する。

さらに、養成大学、養護実習生、指導養護教諭を対象とした調査の結果と課題を踏まえて、体系的な養護実習のプログラムの開発を行う。具体的には、現在、養成機関に一任されている養護実習の内容を検討、精選し、講義との関連を図るとともに、実習日誌、実習マニュアル、評価票についても、養成機関で統一したものを作成し、指導養護教諭の研

修プログラムを作成するなど、養護実習の体系的プログラムの構築を目指す。

#### <文献>

- 1) 文部科学省：養護教諭の資格免許を取得することのできる大学 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287086.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287086.htm) Accessed January 13, 2014
- 2) 大谷尚子、桐佐智子：全国養護教諭養成機関における養護実習の運営について 現状と今後の検討すべき課題について、学校保健研究 36:567-577、1994
- 3) 曾根睦子、笠原紀代子、川優子ほか：養護実習のあり方に関する研究第1報 全国養護教諭養成機関における実習の目的・目標、日本養護教諭教育学会誌 1:16-23、1998
- 4) 養護実習における養護教諭の指導の現状と教育上の課題、石井康子、泊祐子、西田倫子、岐阜県立看護大紀要、VOL(2)3-9、2010
- 5) 養護実習における学生の自己評価の研究、西岡かおり、四国大学紀要、(B)32 23-27、2011
- 6) 養護実習における学生と養護教諭の学びの検討、竹鼻ゆかり、朝倉隆司、渡辺正樹他、東京学芸大学紀要、芸術スポーツ科学系、VOL(62)55-61、2010

## 5. 主な発表論文等

### 【雑誌論文】(計1件)

齋藤千景、竹鼻ゆかり、朝倉隆他  
養護教諭養成大学における養護実習の現状と課題、学校保健研究、査読有、58、2016、75-83

### 【学会発表】(計2件)

齋藤千景、竹鼻ゆかり、朝倉隆他  
養護教諭養成大学における養護実習の現状と課題、日本学校保健学会、2014年11月16日、石川県金沢市、金沢文化ホール

齋藤千景、竹鼻ゆかり、朝倉隆他  
養護実習における学生の自己評価、日本健康相談活動学会、2016年3月5日、東京都小金井市、東京学芸大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

齋藤 千景 (CHIKAGE Saito)  
十文字学園女子大学・人間生活学部  
・准教授  
研究者番号：50618163

### (2) 研究分担者

竹鼻 ゆかり (YUKARI Takehana)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：30296545

中下 富子 (TOMIKO Nakasita)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：50398525

鎌塚 優子 (YUKO Kamazuka)  
静岡大学・教育学部・准教授  
研究者番号：80616540

鹿野 裕美 (HIROMI Shikano)  
宮城大学・看護学部・准教授  
研究者番号：40510631

西岡 かおり (KAORI Nishioka)  
四国大学・生活学部・准教授  
研究者番号：60441581

齊藤 理砂子 (RISAKO Saito)  
聖学院大学・人間福祉学部・准教授  
研究者番号：90634907